

## 幽霊滝の伝説

いつの世から知らぬが、ある寒い冬の晩、黒坂村の麻取場働いている女房や娘などが、大きないろりを囲んで怪談話に気味悪さを感じていたおりから、その中の一人が「今夜これからたった一人で幽霊滝に行ってみたら」と言いだした。

一座の皆は鳥肌を立てて、ぞっとした恐ろしさに震えて顔を見合わせた。

そのうち一座の一人が「もし行く人があれば今日取った麻を全部その人にあげる」

すると「私も」「私も」と全員が言ったとき、一座の中から安本勝という大工の女房が立ち上がって「皆さんが麻を私に下さるなら私が行く」と申し出た。

女衆はお勝の言葉に驚きと悔りの気持ちで「そんならお勝さん幽霊滝へ行ってお賽銭箱を持ってきてつかえ、それが証拠にならあね」と言った。

お勝は、「賽銭箱を持ってきます」と叫んで、眠っていた吾子を背に負い麻取場を駆け出ていった。

霧の深い夜である、星明りをたよりに凍りついた道を無言で、険しい岩石や大杉の根をふみしめ、道ならぬ道を登ると、いよいよ暗くなる。今まで気づかなかった滝の音が耳をゆるがす轟然たる音に気付くや手も足もがくがくと震え、身も心も、しびれおののいて、ただぼうぜんと我を忘れ、ふと見ると白じらと氏神の祠が見えた。賽銭箱も見えた。お勝はかけよって、ずいっと手をのばしたそのとき「お勝つつあん」と滝の中から声がした。

お勝は恐ろしさに、ぞっとして立ちすくんだ。「オイお勝さん」再度の声は警告と脅すような怒気を含んだ様である。

しかしお勝は気を取り直していっさんに駆けだした。やがて麻取場に帰り、皆の前に賽銭箱を置いて幽霊滝の次第を話した。

一座の女房や娘等は気丈なお勝に同情の声を寄せて「こりゃあ取った麻を丸取りされるだけの値打ちのある人だ」と語り合った。

そして、「お勝つつあん、背中の坊やが寒かろう、お腹もすいた時分、かわいそうに」、さっと老母がおぶった子供の紐を解くのを手伝った

そのとき「アッ背中に血が」と叫んだ。「血だ」「血だ」一同が驚き、よく見ると子供の首がいつのまにか取られていたのである

### 参考文献

小泉八雲集「骨董」より 日野町観光協会